自著を語る BOOK

『教師のための
子どもが動く！ コーチング50』

金子書房 1575円
☎03-3941-0111

Profile
1960年生まれ。教育コーチ。心理カウンセラー。愛知教育大学を卒業後、教師になる。現在、愛知県刈谷市立かりがね小学校教諭。第45回読売教育賞受賞。現在、学校やＰＴＡの他、病院や施設などでも研修会を実施。
http://www.katch.ne.jp/~k-kami/

神谷 和宏/ *Kazuhiro Kamiya*

子どもも若手教師もほめて伸ばす

自己評価の低さは大人に原因

首都圏を中心に若い先生が増えていて子どもとのコミュニケーションの取り方をうまく学べないという声を聞きます。ベテランも指導する余裕がありません。本書を通して若手の先生に「これさえ押さえていれば教師としての第一段階はうまくいく」といった指導のヒントにしていただければと思います。

よく研修で、日本の子どもの自己イメージが世界の子どもに比べて低いことを紹介します。多くの先生方は世界との開きに驚きつつ何となく納得がいく表情をします。なぜでしょうか。

大人も自分に自信がない、自己イメージが低いのです。「思えば夢はかなう、と言われるけれど、本当は違うんだ」という思いにとらわれて、それが子どもたちに伝わっているのです。そこを変えるのが私の使命です。

教師が「ダメだ」「やっても無駄だ」ではなく「できる」「やったらうまくいく」と言葉を変えていけば、子どもたちの自己イメージは上がるのです。

当たり前のことができたらほめよう！

肯定的な言葉がなかなか出てこないという先生はほめる基準が高過ぎるのです。ノートがキレイにとれる、手もピシッと挙がる、発言もしっかり。それが出来て「すごい」とほめるぐらいのレベルの高さです。

実は大切なことは子どもの何気ない一言や行動だったりしませんか？ それを見つけてクローズアップしましょう。

全員が遅刻せずに集合できたら「君たち全員時間通りに集まれてすごいよね」とほめる。当たり前のことができることがスゴイとほめられたら、次はもっとやろう、と感じるのが子どもなのです。

新学期の目標をフィードバック

新学期の目標の立てさせ方も、子どもが自己評価を高め、行動を起こせるようなものに改善していきましょう。

例えば「野球がうまくなりたい」と思っている子どもがいるとしましょう。それは目的です。

目的を実現するための階段が目標なのです。私なら10年後、1年後の具体的な行動目標を立てさせます。10年後「野球選手になる」という目標があるなら、1年後には「市内大会で優勝する」、2学期は「素振りを毎日200回やる」と具体的な行動に目を向けさせます。

その時に大切なのが、それぞれの目標を「ほめる」ことなのです。「いい目標ができたね」「すごい、やればできる」と認め、昨日も今日も続けられたことをほめること、そうすれば子どもたちが「できる」と自ら気付いて前向きに頑張れます。

実はそれを実感できれば先生の中にも「子どもを変えることができる」という〝気付き〟が生まれます。その相乗効果でぜひ教室のコミュニケーションを良いものにしていってください。